

1998年10月31日 那智勝浦

社用出張で新宮市に仕事が入って、時間的調整により那智勝浦町ビジネスホテル宿泊の機会を得る。時期的に、サツマシジミかヤクシマルリシジミがいるはずだと、わずかな空き時間を利用してホテル周辺を歩き回ってチョウが遊んでいそうな場所を探す。人家が密集する中にぽつんと小高い丘がみえるので上ってみるが、サツマシジミがいそうな環境なのに見たのはクロヒカゲのみ。さらに足を運んで高台の中学校へと続く草原一帯を探索するも、近くのカシの樹にムラサキシジミを見ただけ。

思い切って海側へと探索サイトを移すと、自動車道の南側にセイタカアワダチソウが黄色い花を咲かせて密生する原っぱがある。これは期待できるぞ、と入り込んでみると、いるいる、普通のルリシジミに混じって明らかにブルーが濃いヤクシマルリシジミが複数頭、求蜜飛来している。ほとんどが新鮮度の低い汚損個体だが、できるだけきれいな個体を選んで採る。



Oct.31,1998 和歌山那智勝浦
ヤクシマルリシジミ

2007年11月24日 周参見

時間的にはまだチョウ活動タイムに少し早い9時半頃、2003年6月に偶然みつけたサツマシジミの発生ポイントに着く。谷筋にはまったく陽光が届いていないが、上方部山側には少しずつ日当たり部分が見え始めているので、まだ日陰の多いサンゴジュ並木をぬけてアスファルトの急な坂道方向へと歩を進める。坂道をのぼりつめると一気に平坦となる路傍のあちこちに、翅表のムラサキ色を輝かせて日向ぼっこをしているムラサキシジミが多く、ときおりウラギンシジミも翅裏の銀白色鱗粉を光らせて目の前を横切って飛ぶ。こんなに蝶がいるとは想定外でビデオもカメラも車においてきたことを悔やむが、この時点ではもっと日当たりがよくなった時間帯にもう一度ここにくればいいと考え、引き返しはしない。右手に背の高いススキ原が茂みを形成し、その中にやはり背の高いノギクの仲間がうすむらさきの花をつけていて、その周辺でブルーのシジミチョウが舞う。ブッシュをかきわけて踏み込むとヤクシマルルシジミだ。ウラナミシジミも混じる。道路に戻ると左手のセイタカアワダチソウの黄色い花にもヤクシマルリシジミが求蜜飛来しており、比較的新鮮な翅表ブルーの濃いヤクシマルリシジミ2♂を採る。ムラサキシジミが届き始めた陽光を受けてきれいな翅表をめいっぱい見せてくれるのに、カメラ類を置いてきたのがくやしい。



Nov.24,2007 和歌山周参見
ヤクシマルリシジミ

ふいにきれいなアサギマダラがふんわりとした飛翔であらわれ、積極的に捕らえようという意思がないまま軽くすくうようにふりぬいたネットの中に入ってしまう。このチョウがゆったりと舞いながら飛ぶ姿はとても優雅で美しいことから、今は白浜で遊んでいる孫たちに生きた状態で持ち帰ってみせてやろう

と、そっと三角紙に包み込む。

突然サツマシジミが飛び出してきてネットの届かない高い木の葉っぱ上で日向ぼっこを始める。しばらく舞い降りてくる気配がないので坂道を下る。その右手セイタカアワダチソウでとてもきれいなヤクシマルリシジミの♀が蜜を求めており、これをすばやくネットイン。自然界では

羽化したての♀でも交尾をしている確率が高いので、生かして持ち帰り採卵してみようという考えが浮かぶ。ピンセットで腹部を圧迫しないよう、慎重に三角紙に取り込もうとしたそのとたん、ピンセットに加える力を加減しすぎていたせいだろう、ヤクルリの♀は、むらさきがかかった深いブルーの美麗翅表の輝きだけを当方の脳裏に焼き付けて、あっというまにどこかへ逃げ去ってしまう。このあと、ここまできれいな♀には出会えなく残念無念（右図は参考のための2002年飼育羽化個体）。



11月30日（日）田辺市：天神崎

2001年5月に妻と訪れて以来の訪問だが、車を止められる場所の環境は以前とほとんど変わりなく、予想したほど冷たい風がふきつけているわけではなく、むしろ大きな岩壁が防風壁となって適度な陽だまりとなっている。ここからすぐに登ることができる日向山を探索するべく車から降りたそのとき、紛れもないヤクシマルリシジミ♂のブルーが輝き、ちょうど車のすぐ前を飛んで日向山の上方へと消える。「いたー！」と急ぎネットとビデオカメラを準備して狭い道を登る。しかし、チョウの姿を目にできたのはこの瞬間だけで、ひととおり探索した全域でチョウには出会えないまま海岸伝いの道路へと戻り出る。よくみると道沿いにノバラの緑色がけっこう目につく。もしかしたらヤクルリの卵か幼虫が見つかるかもしれない。ピンセットを使ってバラの刺をさけながら、すこしずつ、できるだけ新芽に近い葉っぱを観察してゆく。すると、ある。間違いなく白い小さなヤクルリの卵が葉っぱの裏に見つかる。1個見つかり、あとは母蝶が好んで産みつけそうな葉っぱ、茎の傾向がいくらか見当がついてきて、結局、いくらか離れた位置の数箇所でも10卵以上を確保する。「やっぱりきてよかったね。感謝しなくてはね」という妻に「はい、おっしゃるとおりです」と素直に感謝。

12月1日（月）串本町

障害なく海岸へと降りられそうな場所はないものかと何気なしにカーブの突出した部分から下をのぞくと、ちょうど流木が岩場上に固定されてそれを足場に下りられることが分かる。さらにラッキーだったのは、その道路沿い海側壁面にテリハノイバラが自在に枝をのばして繁茂していることだ。葉っぱの量があまりに多く、見つければもうけものという感じで新芽を中心に探すと、意外なほど容易にヤクルリの卵が見つかる。さらには傾向として、海岸側へと地面をはうようにのびる茎よりは、道路沿いに少ない枝でのびる葉っぱに確率高く産卵されていることを知る。あいかわらず曇り空のままだが、突如、ヤクルリのメスが飛来する。どこかに産卵してくれないかと期待してその挙動を見まもるが、結局、ランダム飛翔を繰り返してどこかへと消えてしまう。14時頃までの30分ほどで10卵を確保して、あとは15時前でもチェックインができるという那智勝浦の「ホテルうらしま」へと走る。



和歌山県田辺市天神崎へヤクシマルリシジミの探索に行こうと、田辺市内からの長い渋滞についてしばらく走る。ユニクロの売り出しを目的とした車が多いらしく、あまりにノロノロとしか進まないの一度断念してUターン。ミカン類が安価で売られている「紀州の産直市場よってって：いなり店」で時をすごしたあと、天神崎をあきらめて那智勝浦方面へと向かおうという筆者に、あとで悔やむといけなからとにかく天神崎へ行ってみようよ、と妻が勧めてくれる。確かに後悔するかもしれない、と同意してやや渋滞列が減った国道42号を経て天神崎へと出る。1時間もしないうちに夕陽を観測できるような時刻、海岸道路沿いに点在するノイバラの葉っぱを調べて合計7個のヤクルリ卵を採取でき、やはり来てよかった、との達成感を得る。

2010年12月1-5日に当初から密閉プラスチック容器で保管した卵全てから初令幼虫が孵化。ヤマモモとノイバラに分けて飼育するうち、ヤマモモの1個体を除く6個体が、終令幼虫の段階で体色が黒褐色に変化し、前蛹化できないまま体全体が萎縮してしまう。明らかに何かに寄生されたと判断して異常6個体を別の小さな密閉プラスチック容器に移して経過観察中、2011年1月22日に小さな寄生蜂が発生し、次いで1月24日に同じ寄生蜂2個体が発生。ヤマモモで正常に成育した1個体だけから2011年2月2日にきれいな低温期型のヤクシマルリシジミ♀が羽化。



密閉容器内で発生した寄生蜂は、その標本化と同定を進めるため、まだ2個体の異常幼虫を含む容器を冷凍庫に移して殺虫処理。寄生蜂の写真を撮って、ウェブ検索でみつけた東京農大の大学院生渡辺恭平氏あてに相談メールを入れると、内部寄生性のツバメシジミチビアメバチだと同定でき、しかも、この寄生蜂がシジミチョウの卵に寄生していたことは世界初の記録となる、との想定外の情報が届き大興奮。渡辺氏はその後すぐに、オオムラサキのDNA解析をお願いした神戸大学農学部竹田教授の大学院研究生

として転籍することとなり、本当に不思議な人の縁を感じてしまう。ヤクシマルリシジミの寄生に関して文献調査を進めると、確かに終令幼虫、あるいは前蛹から寄生蜂が発生したという報告はあるが、それら報文には寄生の瞬間を捉えた記述はなく、推定で幼虫が寄生攻撃を受けたとしている。それら全てはもしかしたら卵段階で寄生されていた可能性が高いかもしれない。急ぎ、英文論文として日本鱗翅学会会誌「蝶と蛾」への投稿準備に入り、3月14日に投稿。6月3日に初回審査結果が届き、2名のレフェリー指摘事項に準じて改訂。英文を渡辺氏のついでで英国自然博物館所属チビアメバチ専門の主任研究員であるDr.Gavin Broadに校閲していただける幸運もあって、7月14日に再投稿にこぎつける。

今回の世界初の記録は、ひとえに、妻が天神崎への再訪問を促してくれたおかげであり、感謝の意を込めてこの論文には妻も共著者としてノミネートしている。第2回審査結果が楽しみで、順調に進めば2011年9月のLepidoptera Science, Vol.62, No.3に論文発表となる。